

# 夜明け

キリストの御臨在の使徒



# ドーン誌

2025年3月

## 目次

夜明けのハイライト.....	2
理由なき憎悪.....	2
国際聖書研究.....	16
聖なる国.....	16
神の聖域.....	19
神権の確立.....	23
神に捧げる甘い味わい.....	27
贖罪の日.....	31

*聖書の引用箇所を調べてください！*

## 理由なき憎悪

**「彼らが理由もなく私を憎んだからである。  
ヨハネによる福音書15章25節**

イエスの時代の宗教界はイエスを憎み、ついには死刑にした。彼らがイエスを憎んだのは、イエスの生き方が彼らの生き方に反していたからだ。犠牲の模範によって、イエスは彼らの利己主義を非難し、教えによって、人気のない真理を教えながら、彼らの人気のある誤りを暴いた。

詩篇69:4から引用された冒頭の言葉は、イエスが地上での宣教の終わりの時に弟子たちに語ったものである。イエスは、弟子たちがやがて受けるであろう苦悩と心痛を知っておられ、やがて待ち受ける出来事に備えて彼らの心と体を整えようと努められた。彼は、彼らがつまずくことなく、ペンテコステで聖霊を受け、天の召しのすばらしい特権にあずかる準備ができるようにと願ったのである。ヘブル3:1

## 世評

イエスの宣教中、弟子たちは、謙遜で卑しいイエスに従うだけでは、当時の宗教界の好意を得られないことを学んでいた。大群衆が最愛の主の周りに群がることもあったが、その動機はしばしば、イエスから受けたいと願う物質的あるいは肉的な利益であった。忠実に彼に従おうとしたり、彼の弟子となるために犠牲を払うことを厭わなかったりするほど関心を持つ者はほとんどいなかった。ヨハネ6:26、27、60、66

イエスが十字架につけられる時が来たとき、弟子たちは間違いなく、イエスはどうかして死を免れ、イスラエルの指導者、王としての役割を果たすことができると信じていた。彼らは預言者イザヤの言葉を知っていた。イザヤはメシアについてこう書いている。(イザヤ9:7)。しかし彼らは、メシアの王国の栄光に関する素晴らしい預言が成就する前に、まずメシアが世のために苦しみ、死ぬ必要があることを知らなかった。主人とともにその栄光を分かち合うことが彼らの望みであり、それは間近に迫っていると信じていた。

## イエスは死ななければならぬ

イエスは弟子たちに、間もなく訪れる死の必要性を隠しておかれなかった。その時から、イエスは弟子たちに、エルサレムに行き、長老たち、祭司長たち、律法の教師たちの手にかかって多くの苦しみを受け、殺され、三日目に生き返らなければならぬことを説明し始められた。(マタイ16:21)。イエスの発言は明確であったが、従者たちは、イエスの発言には何か別の意味があると考えたに違いない。

イエスは、弟子たちがまだ弟子としての特権を、物質的な利点や、弟子と関わることで得られる栄光の観点から見ていることを知っておられた。イエスはまた、ペンテコステの後、弟子たちが理解する聖霊に包まれることも知っておられた。しかし今、彼らは主の死が実際に起こるという事実を受け入れることができなかった。

## 嫌われるイエス信者

弟子たちは師を愛し、師が神から任命されたメシアであることを確信していたが、栄光と栄誉の前に、師の宣教に伴う苦しみと死があることをまだ理解し

ていなかった。ペテロは後にこう書いている。"彼らは、自分たちの内におられるキリストの霊が、キリストの苦難とその後の大いなる栄光について前もって語られたとき、それがどのような時、どのような状況について語られているのか不思議に思った。

"1ペテロ1:11

私たちが取り上げた聖句の中で、イエスは自分が理由もなく嫌われていることを認め、こうも説明した。私があなただを選んで世から出たので、世はあなたを憎んでいるのです。私があなたに言ったことを覚えている？ 奴隷は主人より偉くない』。彼らが私を迫害したのだから、当然、あなたも迫害される。もし彼らが私の言うことを聞いていたなら、あなたの言うことも聞くだらう。彼らは、わたしを遣わした方を拒んだのだから、わたしのために、あなたがたにこのようなことをするのである。"ヨハネ15:18-21

しかし、あなたがたは散り散りになり、各自が自分の道を歩み、私だけが残される時が来る。しかし、父が私と共にいてくださるので、私は一人ではない。このことをすべて話したのは、あなたがたが私のうちに平安を持つためである。この地上では、多く

の試練（

）と悲しみがあるでしょう。しかし、わたしは世に打ち勝ったのだから、安心しなさい。"ヨハネによる福音書16章32節と33節

弟子たちに平安と元気を与えるために、散乱と迫害が来るとい警告がなされたというよりも、むしろ、迫害が来たときに、彼らはその本当の意味を理解するようになったということに注意するのがよいだろう。弟子たちはそのとき、自分たちがイエスとともに苦しみを受けるとい大きな特権を得ていることに気づくだろう。イエスが世に打ち勝ち、弟子であり続けるなら、彼らにも世に打ち勝つ力が与えられることを彼らに知ってほしかったのだ。この約束された勝利の保証があれば、世の反対や迫害にもかかわらず、彼らは喜ぶことができる。自分たちが愛する主とともに苦しんでいることを知ることは、忠実に歩み続ける勇気を与えてくれる。

## 克服者

イエスが自らの生涯、宣教、教えの中で示した模範を見れば、クリスチャン生活が敵との闘いの一つであることは明らかだ。絶え間ない戦いが繰り広げられ、私たちは、

、それに打ち勝つ神の力が与えられない限り、私たちを圧倒してしまうような強大な敵と戦っている。悪魔であるサタンはクリスチャンの偉大な敵であり、その味方はこの世と私たち自身の墮落した肉である。(1ペテロ5:8; ヨハネ17:14と15; ローマ7:18)。使徒パウロは、自分自身についてこう書いている。「私は自分の肉体をスポーツ選手のように鍛え、なすべきことをなすように訓練しています。そうでなければ、人に説教した後で、私自身が失格になることを恐れるからです”。第一コリント9:27

この "打ち勝つ" という言葉は、クリスチャンが悪魔に打ち勝ち、世に打ち勝ち、自分の肉に打ち勝つことを表現するのに使われる。悪は、サタンが王子であるこの世の土台そのものである。悪に打ち勝つのではなく、善

を行うことによって悪に打ち勝ちなさい」(ローマ12:21)。(ローマ12:21)。ヨハネも励ましている：「神から生まれた者はみな、世に打ち勝つのです。これこそ、世に打ち勝った勝利(ギリシア語で成功の意味)、すなわち、私たちの信仰なのです。」  
第1ヨハネ5:4

## 神は愛なり

私たちの天の父は愛の創造者であり、時代を超えてそのスポンサーである。しかし、サタンは利己主義の創造者である。この2つの原則は、人間の墮落以来ずっと、互いに争ってきた。神の民-、どの時代においても神に忠実に仕えてきた人々は、神への愛に突き動かされてきた。彼らは神と神の御霊によって導かれてきたが、他の大多数の人類は利己主義の原則に支配された人生を歩んできた。

人は神に似せて造られ、その痕跡は今も残り、多くの人の親切な行いに現れている。(創世記1:27)。しかし、この世とその精神に打ち勝つには、時折親切な行いをすることではない。それは、自分のために生きるという原則から、神のために生き、神の奉仕に人生を捧げるといふ原則への転換でなければな

らない。罪のせいで、「自分自身」が人間一族に支配的な人生の動機として採用されてきた。それが普通とされるほど、世の中の生き方となっている。私利私欲はこの世を支配する原理であり、サタンは"この世の神"である。2コリント4:4

## 愛し合う

利己主義をなくし、愛の原理を人生の指針として地球全体に確立する唯一の方法は、神の救いの計画である。イエスにおいて、私たちは生き方としての愛の最も包括的な模範（  
）を示している。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。"と。ヨハネによる福音書13章34節

マタイ19:16-22、ルカ18:18-

23)。自己保存の掟に従って、彼は自分のためにこの世の財を蓄え、それを人に分け与える準備ができていなかったのだ。弟子たちは、金持ちの青年に対するイエスの忠告が、あらゆる私利私欲を放棄した無謀なものであることに当惑した。

## 真の弟子

ペテロはイエスに言った：「私たちはすべてを捨てて、あなたに従ってきました！では、私たちのために何があるのでしょうか。(マタイ19:27)。ペテロは、弟子として、イエスが若い富豪に課そうとした条件に従ったことを、イエスに思い出させたのだ。彼らのすべては彼のすべてほどではなかったが、原理は同じだった。このような犠牲を払った彼らは当然

、その見返りとして何が期待できるかを知りたがった。ペテロの質問は、彼がまだ弟子としての本当の精神を理解していなかったことを明らかにしている。彼はおそらく、名誉や名声のようなものを受け取れることを期待していたのだろう。謙虚な漁師である代わりに、メシアの王国で目立つ地位、支配者、あるいは人の中の偉大な者になることを望んでいたのかもしれない。

イエスは答えられた：「世が新しくなり、人の子がその栄光の座に着くとき、わたしに従ったあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくであろう。そして、わたしのために、家、兄

弟、姉妹、父、母、子供、財産を捨てた者はみな、その百倍の見返りを受け、永遠の命を受け継ぐのです」。(マタイ19:28-

29)。この一節から、主がクリスチャンに他者を犠牲にすることを望んでおられると誤解してはならない。家族から必要な安らぎや糧を奪うのは間違っている。しかし、そうして得た余剰は主のものである。

## 十字架を背負う

イエスが弟子たちに、エルサレムに行き、そこで逮捕されて死刑になることを告げたとき、ペテロはそれを聞かなかった。「しかし、ペテロはイエスをわきに連れて行き、そのようなことを言うてはいけないと叱責し始めた。「主よ、天は禁じておられます。「このようなことは、あなたには決して起こりません。イエスの返事はこうだった：「私から離れなさい、サタン！あなたは私にとって危険な罠です。あなたは、神の視点ではなく、単に人間的な視点から物事を見ているのです」(マタイ16：22-

23)。(マタイ16:22-

23)。ペテロは、私利私欲に流されて、敵が待ち構

えているエルサレムに行くなど、師を説得しようとしていたのだ。

ペテロは知らず知らずのうちに、サタンの大義を押し進めていたのである。サタンは常に、自分のことを第一に考えるよう人々に勧める。サタンが支配するこの世の人々は、自分のことを第一に考えることが多い。それは公然と彼らの生き方であり、エデンの時代からそうであった。イエスは弟子たちに言われた、「あなたがたの中で、わたしに従いたいと思う者がいるなら、自分の道を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従いなさい。もし、自分の命にしがみつこうとするなら、それを失うことになる。しかし、わたしのために自分の命を捨てるなら、それは救われるのです」24節と25節

イエスはその時でさえ、全世界の人類のために犠牲的に命を失っていたのだ。一般的に言って、今日の社会では、自分以外の人のことを考えるのは愚かなことだと考える人が多い。しかしイエスは、"自分第一

"という世俗的な原則に従うのではなく、神の方法で自分たちの命が救われるという事実に向け

ることで、ペテロや他の弟子たちの心と心に訴えかけたのである。

世に打ち勝つということは、クリスチャンとして、私たちがあらゆる面を取り囲まれている利己主義の原則に立ち向かうということである。神に、真理に、兄弟たちに仕えるために、私心なく命を捨てるのだ。(ピリピ3:7と8、第一ヨハネ3:16)。私たちは  
"世から出る

"ように召されているのでも、世から孤立して生きるように召されているのでもない。(ヨハネ17:15)。むしろ、私たちは世にいるけれども、その原則や基準から離れ、その利己的な精神に影響されないようにしなければならない。私たちに課せられている試練は、私たちが物理的にこの世に生き、働いている間、その一般的な精神に合わせることなく、神の愛の大義のために命を落とす努力を続けることである。ローマ12:2

## 死に至る洗礼

毎年、私たちの主イエスの犠牲の死を記念するとき、クリスチャンには豊かな祝福が待っている。象徴的なパンと杯を口にすることは、私たちがイエスの

犠牲の恩恵を受けることを表している。(マタイ26:26-

29)。こうしてイエスの身代わりの犠牲の恩恵を受けた私たちは、私たちに対する神の恵みを喜び、「日々死ぬ」、いわば自分を捨て、神のみこころを行うために命を捨てるという犠牲の特権をも思い起こすのである。(第1コリント15:13)。これには、世間から排斥されたり、体力を消耗したり、言葉によって私たちを中傷した人たちから傷つけられたりすることが含まれるかもしれない。

私たちはイエスの死にあずかるバプテスマを受けている。「バプテスマによってキリスト・イエスと結ばれたとき、私たちはイエスの死に結ばれたことを忘れたのか。私たちは死に、バプテスマによってキリストとともに葬られたのです。キリストが御父の栄光の力によって死者の中からよみがえられたように、私たちもまた、新しい人生を生きることができるのです」。

私たちは彼の死によって彼と結ばれたのだから、彼のようによみがえらされるのである。ローマ6:3-5

私たちは、親愛なる主であり師である方の足跡をたどるよう、特別な招待を受けている。彼に

"ということは、私たちの世界での経験が彼と同じようになるということだ。

、奴隷は主人より偉いわけではない。また、使者はメッセージを送る者よりも重要ではない。"（ヨハネ13:16）。（ヨハネ13:16）。主人の足跡に忠実に従う者には、たとえ「理由もなく憎まれる」としても、約束が与えられている：「わたしが勝利して、父とともにその御座に座ったように、勝利する者は、わたしとともにわたしの御座に座るであろう。黙示録3:21

## 聖なる国

キー・ヴァース「あなたがたは、わたしの祭司の王国、わたしの聖なる国民となる。これが、あなたがイスラエルの人々に伝えなければならないメッセージです。」

出エジプト記19:6

厳選された聖典

出エジプト記18:12-27、19:1-14

イスラエル民族は、神の約束と律法の指示に基づいて建国された。神の約束に示された神の計画に失敗はありえないが、その計画におけるイスラエル民族の地位、そして他のすべての民族の地位は、神の御心に従うことが条件である。私たちのキー・ヴァースは、イスラエルの民が他のすべての国々から分離されることを指摘している。

モーセの義父であるエテロが、偉大な律法学者に今日のレッスンの第一節にあるような時宜を得た助言を与えたのは、明らかに神の摂理であった。(出エジプト記18:12-

18)。モーセは勤勉で疲れ知らずの働き手であった。しかし、義父は利害関係のない立場からこの状況を観察し、モーセが彼らのささいな問題をすべて聞き、裁こうとするあまり、いたずらに自分自身を消耗させているだけでなく、民自身にも効率的な奉仕がなされていないことを見抜いていた。この仕事は、一人の人間が適切に処理するにはあまりにも多すぎたのだ。

エテロは、モーセへの忠告に見られるように、明らかに知恵があり、高い義理を重んじる人物であった。エテロは義理の息子に、イスラエルの民のさまざまな人数の上に「有能な人」、すなわち支配者や裁判官を任命するように助言し、その人たちが利己的でも貪欲でもなく、原則を持った人であるようにと戒めた。エテロは、モーセが知っていたに違いないように、不義な主義主張の持ち主は、支配する民の利益よりも自分の利益を追求することを悟っていた。そのような性格の者は、祝福どころか、国にとって呪いとなる。

イスラエルのこれらの "有能な人々" は、モーセの指導の下で民に仕えた。モーセが神から律法を受け取り、それを民に伝えるよう指示されたとき、モーセはこれらの長老、つまり代表者を呼び集めた。モーセは彼らに神の律法の詳細（ ）を教え、彼らがまず民を正しく指導し、次に民を正しく裁くために必要な理解を得られるようにした。

成人したイスラエル人60万人がエジプトを去った。(出エジプト記12:37)。出エジプト記12:37) これは、女性や子供も含めると、おそらく合計100万人以上ということになる。このような大勢に神の律法を教えようとする場合、一個人がどのような問題に直面するかは想像に難くない。印刷物も、ラジオも、テレビも、携帯電話も、インターネットもない時代である。モーセには、シナイ山で神から受け取った律法の必要な詳細を民に伝えるという重要な仕事を任せられる、よく組織化された集団がいたことは確かである。それに対して民は、主が語られたことをすべて実行すると言った。出エジプト記19:8

## 神の聖域

キー・ヴァース「イスラエルの人々に聖なる聖所を造らせなさい。あなたがたは、この幕屋とその備品を、わたしが示す型にしたがって、正確に建てなければならない。」  
出エジプト記25:8-9

厳選された聖典  
出エジプト記25章から27章

幕屋建設のためにモーセに与えられた指示は、出エジプト記25-27章にあり、その工事の実行については35-40章に記されている。聖なる部分と至聖なる部分からなる幕屋は、神の言葉によれば「聖所」であった。この幕屋は、金で覆われたシツィム（アカシア）の板を銀のソケットにはめ込み、同じく金で覆われた同じ木の棒でしっかりと固定したものである。出エジプト記26:15-30

1キュビトの長さが18インチであることから、この建物は幅15フィート、高さ15フィート、長さ45フィートで、正面または東の端に開口していた。大きな白い亜麻布で覆われ、青、紫、緋色のケルビムの像が織り込まれていた。(1-3節)。開いている端、つまり建物の前面は、覆いの布と同じような材質の幕で閉じられており、「戸」、つまり第一のベールと呼ばれていた。(36節と37節)。同じ布で、同じようにケルビムの絵が描かれたもう一つの布は、「ベール」または第二のベールと呼ばれ、幕屋を二つの区画に分けるように吊るされた。(31-33節)。第一の区画は、幅15フィート、長さ30フィートで、"聖所"と呼ばれた。第二の区画は、幅15フィート、長さ15フィートで、"至聖所"と呼ばれた。この二つの区画が幕屋を構成していた。幕屋の上には、避難のために追加の覆いが建てられた。一つはカシミヤの布かヤギの毛で、もう一つは赤く染めた雄羊の皮で、一番上の覆いはアザラシの皮でできていた。

神がイスラエルの民に命じて荒野に建てさせた幕屋と、それに関連するすべての宗教的な奉仕や儀式（）は、使徒パウロが言うように、"影であり、来るべき良いことのおぼろげな予告であった"（ヘブル10:5; 8:5; コロサイ2:16-17）。（ヘブル10:1; 8:5; コロサイ2:16-

17）。イスラエルの民が毎年繰り返させられたこれらの儀式は、イエスを中心とする「より良いいけにえ」を指し示すものであり、それはイエスの初降臨の時に導入されるものである。（ヘブル9:19-24）。これらはイスラエルだけでなく、全人類に永遠の救いをもたらすのである。1テモテ2:5-6

神が幕屋建設の細部に至るまで、どれほど注意深く導き、指示されたかを理解されたい。神はモーセを山に連れて行き、すべての部分とその作り方について具体的な指示を与えた。「わたしがこの山であなたに示した型にしたがって、すべてを造りなさい。（ヘブル8:5、出エジプト25:40）。神の「聖所」の建設に関して、モーセを通して神からイスラエルの民に与えられたすべての詳細は、神の指示に正確に従わなければならなかった。民は、不注意で違反した場合に厳しい罰則を受けることがないように、こ

これらのことを特に意識していなければならなかった。  
。

これらのすべての整えが、"聖所の奉仕者であり、人ではなく主が立てられた真の幕屋の奉仕者"であるイエスを指し示していることを、私たちはどれほど感謝していることだろう。ヘブル8:2

## 神権の確立

**重要な聖句「アロンとその子らの腰に帯を巻き、特別な頭巾をかぶせなさい。そうすれば、祭司職の権利は永遠に彼らのものとなる。このようにして、あなたがたはアロンとその子らを聖任するのである。」**

**出エジプト記29:9**

**厳選された聖典**

**出エジプト記29:1-9、35-37**

出エジプト記の大部分は、イスラエルの幕屋の建設について書かれている。神は、イスラエル人がエジプトを出発してから約12ヶ月後の宗教的な年の初日までに、幕屋を完全に建設するように命じられた。神はまた、各調度品をどこに置くべきかをモーセに告げられた。出エジプト記40:1-8

モーセは神の忠実な僕として、受けた命令を指示された通りに実行した。(16-33節)。聖書は、イスラエルの礼拝の中心地（

)に関連する目に見える幕屋が、現在の福音時代の教会と未来の全人類家族に関連する天の現実を描いていたことを教えている。ヘブル9:23-28; 黙示録21:1-5

さらに、幕屋に関連して祭司職を務めるアロンとその息子たちに油を注ぐための指示が与えられた。これらの指示には、聖別式とイスラエルの祭司職就任に関する詳細も含まれていた。出エジプト記40:13-15; レビ記8章と9章

イスラエルの祭司職の就任式には、神の指示の下、詳細な儀式が執り行われた。使徒が、イスラエルとの取り決めは「来るべき良いことの影」であったと述べているように、私たちは、この奉献祭から教訓を得ることが正当である。ヘブル10:1; 5:5-6

アロンとその息子たちの聖別式は7日間続いた。(レビ記8:33)。聖書では、7という数字は、その数字が適用されるものの全体、あるいは完全性を表すのに用いられる。従って、7日間の聖別は、大祭司であるイエスとその足跡に従う下祭司たちの聖別が、人生のあらゆる側面に関わるものであり、永遠に続

くものであるという事実を、  
、非常に力強く描き出している。

すでに述べたように、イスラエルの祭司は、神がご自身の祝福をイスラエルに与え、ご自分に関係することを指示される存在であった。だから、神に完全に献身する大いなるメルキゼデク祭司職の一員となる見込みのある者もまた、この恵まれた地位に召された神の永遠の目的を悟り、感謝しなければならない。彼らは、来るべき神の王国において、全人類に祝福を施す"王家の祭司職"の一員となるのである。

「もし、レビ人の祭司職によって完成に達することができたのなら、なぜ、アロンの位ではなく、メルキゼデクの位の祭司が来る必要があったのでしょうか。祭司職が変われば、律法も変わらなければならないからです。これらのことが言われている人は、別の部族に属していたのであり、その部族から祭壇に仕えた者はいない。私たちの主がユダの子孫であることは明らかであり、その部族については、モーセは祭司について何も述べていないからである。...メルキゼデクのようなもう一人の祭司（  
）が現れる。その祭司は、先祖に関する規定に基づいてではなく、不滅の命の力に基づいて祭司となっ

た者である。こう宣言されている：「あなたは、メルキゼデクの位階にある永遠の祭司です。ヘブル7:11-17

## 神に捧げる甘い味わい

キー・ヴァース「あなたは内臓と足を水で洗い、祭司はそのすべてを祭壇の上で焼かなければならない。それは燔祭であり、食物の供え物であり、主に喜ばれる香りである。」  
レビ記1:9

厳選された聖典  
レビ記1:1-17

嗅覚が示す象徴は、聖書の中で犠牲と献身の思いを伝えるために使われている。エフェソの信徒への手紙5章2節で、使徒はこう言っている。"キリストが私たちを愛し、私たちのためにご自身を捧げられたように、私たちも愛の道を歩みなさい。この言葉によって、パウロは私たちをイスラエルの幕屋の儀式に引き戻し、その儀式に関連して、聖なる区画にある金の祭壇の上で香が焚かれ、その香りの匂いが第二のベールを越えて至聖所にまで浸透していたことを思い起こさせる。この行為の指示には、"だから

香は、  
、代々、主の御前で定期的に焚かれる  
"と記されていた。出エジプト記30:1-8

幕屋の礼拝を規定する指示は非常に正確だった。イスラエルの贖罪の日には、大祭司アロンが罪の捧げ物のいけにえの血を至聖所に運び、慈しみの座に振りかける。しかし、その前に、アロンがベールの下をくぐる前に、その煙と匂いを至聖所に浸透させるために、まず金の祭壇で香を焚く必要があった。そうしなければ、至聖所に入るときに死んでしまうからである。(レビ記16:11-14)。焼香の煙と匂いは、犠牲の業が正しく行われ、神に受け入れられたことの証拠であった。

キー・ヴァースとその文脈に示されているように、かがり火の祭壇で焼かれた動物のいけにえもまた、「主への甘い香り」とみなされた。(レビ記1:5-9)。肉や穀物の供え物も、主の指示に従って祭壇の上で焼かれたとき、同様に "甘い香味"とみなされた。レビ記2:1-9

甘美な香り」とされたイスラエルの前述の儀式はすべて、イエスの宣教、従順、犠牲を、さまざまな形で指し示すものであった。(エペソ5

:2)。主イエスに奉献された信者たちもまた、犠牲を捧げ、イエスの死にあずかるバプテスマを受けるよう招かれている。(ローマ12:1; 6:3-4)。クリスチャンの犠牲の働きは、特に"キリストの体"の仲間のために向けられる。第一コリント12:12-14, 27

ピリピ4:18で、使徒パウロは、ピリピの教会側がローマで獄中にあったパウロに贈り物を送ったという犠牲の証拠について言及し、それを"神に喜ばれる、香ばしい供え物、受け入れ可能ないけにえ"と言っている。ここには、イスラエルの幕屋の教訓を教会に適用するパウロ自身の権威がある。さらに、神は私たちの犠牲と奉仕を互いに捧げ合う真心によって、私たちが神に献身しているかどうかを試されているのだ。

嗅覚の象徴は、神への真の献身と単なる口先だけの奉仕とを見分けるのに役立つはずだ。犠牲の"匂い"が感じられないところでは、真理がどれほど深く私たちの霊的生活に浸透しているのか疑問に思うかもしれない。真理に対する私たちのビジョンは、他

者のために犠牲を払い、  
奉仕する特権を明らかにするはずであり、主に対する私たちの心からの献身は、他の人々が祝福されるために、私たちの命を捨てることを素早くさせるはずである。こうして、私たちの献身の甘い香りは強くなる。ヨハネ15:13；第一ヨハネ4:7-11

## 贖罪の日

キー・ヴァース「第七の月の十日には、あなたがたは自分を捨て、どんな仕事もしてはならない・  
・この日に、あなたがたのために贖いが行われ、あなたがたを清めるからである。そうすれば、主の御前で、あなたがたはすべての罪から清められる。」

レビ記16:29-30

厳選された聖典

レビ記16:2-9、11-19、27-34

今日のレッスンは、レビ記第16章に記されている、イスラエルで毎年行われる贖罪の日に行われる幕屋の礼拝に関するものである。この重要な礼拝は、ユダヤの宗教的な年の第7の月の10日に行われました。大祭司が至聖所（幕屋の一番奥の区画）に入り、国民の罪を贖う日であり、一年で最も厳粛な日とされていた。この特別な日の礼拝を執り行うために、大祭司アロンは通常の「栄光と美の衣」

、白い亜麻布の犠牲の衣を身にまとった。出エジプト記28:2-39; レビ記16:4

アロンは、贖いのいけにえのために雄牛と山羊を調達するように指示された。雄牛はアロン自身が用意し、自分とその家のための罪の捧げ物として幕屋の中庭で殺されることになっていた。雄牛の脂肪は青銅の祭壇の上で焼かれた。雄牛は脂肪が多いので、猛烈に燃えて、外にいる人の目には濃い煙が立ちのぼったに違いない。レビ記16:3、5-6、25

その後、アロンは香炉に火で燃やした炭を入れ、甘い香とともに幕屋の第一区画である至聖所に持ち込むことになっていた。その香炉を金の祭壇の上に置き、香を振りかけると、甘い香りの煙が立ちのぼり、第二のヴェールを越えて至聖所に至る。これが綿密に行われた後、アロンは安全に至聖所に入り、最後の贖罪の儀式を行うことができた。そこで彼は、雄牛の血を慈しみの座の上と前に振りかけるのである。

幕屋の外、幕屋を囲む陣營の外には、もう一つの火があるはずだった。そこでは、雄牛の下劣な部分（皮、肉、糞）が焼かれることになっていた。この場

面は、幕屋の周りに宿営していたイスラエル人全員が見ることができ、幕屋の中庭を囲む亜麻布のカーテンや、聖なる場所と至聖なる場所の閉鎖的な性質によって見えにくくなっていた贖罪の日の他の犠牲的儀式とは明確に区別された。こうして、雄牛のささげ物は完成した。

次に、罪の捧げ物のためのヤギがささげられた。このためにイスラエルの民の中から取り出され、幕屋の戸口で主の前にささげられた。主の山羊は幕屋の中庭で殺され、その血は至聖所に持ち込まれ、雄牛の血と同じように振りかけられた。その皮、肉、糞も同様に、イスラエルの宿営の外で焼かれた。

パウロは、「これらのことは、彼ら（イスラエル人）に起こった。それらは、時代の終わりに生きる私たちに警告するために書き記されたのです」。それらは「影であり、これから起こる良いこと（ ）のおぼろげな予告」であり、イエスを中心とする「より良いいけにえ」であった。1コリント10:11; ヘブル10:1; 9:23